Carnap
Quine
Kripke

言語哲学大全Ⅲ

意味と様相（下）

飯田　隆

勁草書房

江苏工业学院图书馆
藏书

言語哲学大全Ⅲ

意味と様相（下）

飯田　隆

京都大学図書

勁草書房

著者略歴

1948年　札幌市に生まれる
1972年　東京大学教養学部卒
現　在　千葉大学教授
著　書　『言語哲学大全Ⅰ』(勁草書房)
　　『言語哲学大全Ⅱ』(勁草書房)
編　著　『リーディングス　数学の哲学　ゲーデル以後』(勁草書房)
　　『ウィトゲンシュタイン読本』(法政大学出版局)

言語哲学大全Ⅲ　意味と様相 (下)

1995年11月25日　第1版第1刷発行

著者　飯田　隆

発行者　八田恒平

発行所　株式会社　勁草書房

112 東京都文京区後楽2-23-15　振替　00150-2-175253
電話（編集）03-3815-5277　（営業）03-3814-6861
FAX 03-3814-6854
図書印刷・和田製本

© IIDA Takashi 1995 Printed in Japan
＊落丁本・乱丁本はお取替いたします。
＊本書の全部または一部の複写・複製・転訳載および磁気または光記録媒体への入力等を禁じます。

ISBN　4-326-15311-3

まえがき

『言語哲学大全Ⅱ　意味と様相（上）』から、この第Ⅲ巻まで、思いがけずも多くの時間が経ってしまった。私の友人たちは、今度出るのは『意味と様相（中）』であるとか、『意味と様相（下の上）』であるとか予想を立てていたようであるが、申し訳ないことに、この第Ⅲ巻の副題は『意味と様相（下）』である。私はこれまでタイトルに「上」とつくものはいくつか書いたことがあるが、「下」とつくものを書いたのは初めてである。しかも、「下の上」でも「下の中」でもなく、端的に「下」である。個人的にはこのことがいちばんうれしい。

しかし、他方で心配の種がないわけではない。この「入門書」のシリーズも今回で三巻目になる勘定だが、巻を重ねるにつれて各巻の分量がじわじわと増してきていることに著者としても気付かざるをえない。それに応じて値段の方も上がっている。書く方は当人の勝手だとしても、読む側、あるいは買う側として望ましくない状況であることははっきりしている。

とくにこの第Ⅲ巻に関しては、量的あるいは金銭的にだけでなく、質的にも読者への要求が増して

いるような気がして心配である。そこで、これは私の不安をなだめるだけのことになるのかもしれないが、この機会にいくらか言葉を費やして、本文での議論の見通しが少しでもつきやすいようにしておきたい。

可能世界という概念が、この第Ⅲ巻の主題である。この概念はいまや、哲学以外の分野でもしばしば耳にするようになった。そのこと自体は喜ばしいことであると私は思っている。なぜなら、それはちょうど、それほど親しいわけではないが付き合いのある知人が有名になったようなものだからである。ただし、私が耳にすることのなかには、これが果たしてあの人と同じ人だろうかと思わせるようなこともないわけではない。したがって、ここで私は、私の知っている限りでのこの概念の生い立ちについて語ろうと思った。

だが、「生い立ち」と言うのは適切ではない。というのは、この概念の本当の生い立ちは、私にはその知識が決定的に不足しているはるか昔にさかのぼるからである。ふつうそれはライプニッツにまでさかのぼるとされるが、中世にまでさかのぼると言う人もいる。私がここで述べることができるのはむしろ、可能世界という概念が二十世紀においてどのような仕方で再生したかということである。再生のきっかけは、「様相論理」と呼ばれる、じつはこれもまた古い主題でありながら長年かえりみられることのなかった、論理学の一分野に求められる。再興されたといっても、一九五〇年代までの様相論理の歴史は苦渋に満ちたものであった。それが一転したのは、「可能世界意味論」と呼ばれる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一九五〇年代末に登場した理論のおかげである。

「様相論理に意味論が供給されたらしい、しかも、その中心概念は何やら刺激的なものらしい」というニュースはまもなく、様相論理と一見関係ないと思われるような哲学の分野にまで伝わった。だが、このニュースがもっとも早く伝わり、かつ、大きな影響を与えたのは、言語哲学の分野においてである。この影響は、言語哲学の「応用」と「基礎」の両面にわたる。一方で、フレーゲ以来の標準的論理に基づく言語以外の言語に意味論が供給されたという知らせは、それ以前ならばユートピア的としか思われなかった、自然言語の厳密な意味論という企てに刺激と希望を与えた。他方、可能世界意味論の建設者のひとりであるクリプキが展開した、指示の問題への斬新な見方は、フレーゲ・ラッセル以来の問題を、もう一度、その基本に戻って考え直さなければならないということを、多くの哲学者に認識させた。一九七〇年代の言語哲学は、まさに可能世界意味論の余震であったとさえ言えないことはない。

しかしながら、私の見るところ、可能世界意味論以後の展開のなかには、ふたつの大きな謎がある。そのふたつの謎の解明こそが、この巻での議論の中心にある。謎のひとつは、クワインの様相論理批判の議論はいったいどうなったのかということであり、もうひとつは、指示の理論が可能世界意味論といったいどんな関係にあるのかということである。

(1)　可能世界意味論が出現する前までの様相論理の評判は、きわめて芳しくないものであった。数

学的には瑣末、哲学的には不健全というのが、玄人筋のあいだでの様相論理の定評であったとさえ言える。数学的評価はともかく、こうした哲学的評価は主に、長年にわたるクワインの仮借ない様相論理批判によって形成されたものである。ところが、可能世界意味論の登場以後、クワインの議論は、ときたま思い出したように呼び出されることはあっても、いつのまにか哲学的論争の舞台から退場してしまったような印象がある。クワインの批判が可能世界意味論によって答えられたから、こうしたことが起こったのか、それとも、これまた哲学では珍しくない現象のひとつ、つまり、流行のなせるわざなのだろうか。

(2)

哲学者のあいだでの可能世界意味論への関心がかきたてられたのは、何にもましてクリプキの「名指しと必然性」のせいであると言ってほぼ間違いない。一九七〇年代は、「新しい」という形容がはやった時代である。クーンやファイヤアーベントらの「新しい科学哲学」にいくらか遅れてわれわれがしばしば耳にするようになったのは、「新しい指示論」という呼称である。「名指しと必然性」こそ、この「新しい指示論」のもっとも権威ある典拠とみなされた。他方、クリプキが、十代で可能世界意味論を発見した早熟の論理的天才であるという評判も漏れ聞こえていた。可能世界の概念が「名指しと必然性」の各所で言及されている事実と、クリプキのこうした評判とから、「新しい指示論」が可能世界意味論と不可分の関係にあると考えたくなるのはもっともである。しかし、指示の問題と可能世界の概念とは、どうやって結び付くのだろうか。

これらふたつの謎はどちらも、様相論理の入門書をちょっと見たからと言って解けるものではない。その第一の理由は、そうした入門書が力点を置いているのは様相命題論理の意味論であり、命題論理の範囲にとどまる限りは、これらの謎の解決の鍵とも言うべき事象様相 modality *de re* は話題にものぼらないからである。物や人はそれが現実にどうあるかとは別に、そうあったかもしれない性質（可能的性質）やそうあらざるをえない性質（必然的性質）をもつと考えるときに話題となっているのが、事象様相である。可能世界がこの巻の表向きの主役であるとすれば、事象様相はじつにその陰の主役とも言うべきものである。これが様相論理の場面で登場するのは、様相が量化と組み合わされたとき、すなわち、様相量化論理の意味論においてである。だが、様相量化論理の意味論ほど錯綜した主題はまれであり、しかも、未だに標準的な理論が存在していないという現状がある。これは、「入門書」を書く立場としてはかなり苦しい状況である。いろいろと迷った末に、「こんなむずかしいものが何で入門書なのか」と言われるのを覚悟で、あえてこの主題に立ち入ることにした。この決定がはたして正しかったかどうか未だ一抹の不安が残るが、いまとなっては、このままにしておくしかない。

読者の安心のために急いで付け加えるが、いったん事象様相が様相論理の可能世界意味論とどういう関係にあるのかが、おぼろげながらでも把握できたならば、後はそれほどむずかしくはないはずである。（じつは、そうした把握さえできたならば、テクニカルな議論の大部分は忘れてしまってもかまわない。哲学にとって重要な論理的研究とは、多くの場合そのような性格をもっている。）クワイ

ンの様相論理批判の議論の中核にあるのは、事象様相というものにそもそも意味をもたせることができるのかという問いである。この問いに対するクワインの否定的解答に多くの哲学者が賛同したのは、今世紀なかばまでの言語哲学において広く受け入れられてきたふたつの信念のせいである。（そして、可能世界意味論の最大の貢献は、これらの伝統的信念を突き崩したことにある。）第一は、必然性とは分析性の別名であるという信念であり、第二は、その機能が対象を指示することだけに尽きるような「純正指示表現」は存在しないという信念である。前者は、本書の第一部、つまり、第Ⅱ巻の主題であった。第Ⅱ巻とこの第Ⅲ巻と合わせて「意味と様相」と題されているのは、可能世界意味論以後の言語哲学の展開が、必然性に対する態度の根本的な変更ということを背景にしてよりよく了解できると考えたからである。（したがって、第Ⅱ巻の「まえがき」でも言ったことだが、ここで「本書」と言うのは、第Ⅱ巻と第Ⅲ巻の両方を指している。）他方、後者は、フレーゲおよびラッセルの理論の影響下に形成された信念である。したがって、この信念を改めて問題にする点において、この第Ⅲ巻は、第Ⅰ巻の最後につながる。

このように言うと、この巻は、それに先立つ巻を読んでいなければ読めないのかと思われるだろうが、必ずしもそうではない。どのような理由であるかは問わず、様相論理に興味をもつひとや、可能世界という概念が現代の哲学のなかでどのように取り扱われているのかを知りたいというひとは、この巻だけを読んでも、それなりに何かを得られるはずである。すでに第Ⅰ巻と第Ⅱ巻をおもちの読者のために、それらの巻の関係箇所への参照を求めている場合もあるが、それはそれで気にしなくても

よい。とはいえ、この巻で扱われている主題を、より広い視野のもとに置きたいという殊勝な心がけをおもちの読者がもしいれば、先立つ巻をぜひお読みくださいと言うのが、著者としては当然であろう。

この第Ⅲ巻の内容に戻れば、第4章は、可能世界意味論以前の様相論理をめぐる哲学的議論を追跡している。その過程で、事象様相の有意味性をめぐる攻防がその中心にあることが明らかになる。可能世界の概念は、第5章と第6章で検討される。この概念の形式的および哲学的内容に関していちおう知っておくべきことは、できるだけ取り上げたはずであるが、それでも、取り上げ方が不十分であったり、まったく取り上げなかったことも多い。事象様相については、5・3節でその形式的側面が、6・4節でその哲学的側面が論じられる。とくに5・3節は、問題の様相量化論理の意味論を扱っているので、この節を生き延びられない読者が多いのではないかとおそれているが、第6章は、その前の章ほど形式的な議論は多くないし、「新しい指示論」をめぐる第7章まで、飛ばし読みでもどうにか来てしまえば、後はどうにかなるので、途中でめげてもまた先で読めそうなところを探して読み進めて頂きたい。

「上」と題した巻があれば、「下」なり「中」なり「下の上」なりがそれほど間をあかずに出るのが世間の常識であると私は信じている。にもかかわらず、私自身が信じている常識を私が破らざるをえなかったのは、次に挙げる三人のせいである。ひとりはカルナップであり、あとのふたりはわが家の

双子である。この巻の主題から言ってカルナップは落とすことのできない哲学者である。そんなわけで、カルナップについての独立の章を、じつは第Ⅱ巻のときから用意していたのであるが、その章を読み返しては書き直すということをずいぶんと繰り返した。いま考えてみればあきれてしまうが、じつに三年間がそれに費やされた。そうこうするうちに、我が家に双子が出現して、しばらくはカルナップどころの騒ぎではなくなった。少なくとも最初の一年はまったく何も手につかないままに過ぎた。それでも、初めこそ異星からの生き物のようであった子供たちも、いまや着々と言語共同体に組み込まれようとしている。

小さな双子がいる環境のなかで本を一冊書こうなどというのは無謀に近いが、それをともかくにも果すことができたのは、何よりも妻百合子のおかげである。もちろん、それは、千葉大学文学部における同僚諸氏をはじめとする多くのひとびとのおかげでもある。また、幸運だったのは、大阪市立大学文学部で一九九四年の夏と冬の二度にわたって集中講義を行う機会が与えられたことであった。原稿をまとめるのに何よりのこうした機会を与えてくださった方々、および、私の講義に付き合ってくれた学生諸君に深く感謝する。この巻に結局盛り込めないことになったことも多いが、それでも関係ある主題についての講義は、千葉大学文学部、北海道大学文学部、東京大学教養学部で行った。教えるということで得をするのは、教わる側ではなく教える側であるという法則をまたしても実証する結果になったのではないかとおそれる。

勁草書房編集部の富岡勝氏には、どう感謝したらよいのか途方に暮れる。氏はときたま現れては我

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

が家の双子の人気を独占しながら、「まあ、ゆっくり行きましょう」といった調子で、ことさらに督促はせずとも、激励と支援を惜しまれなかった。「上」が出てから「下」が出るまでの長い遅滞だけでなく、その他多くのわがままを許して頂いたことに、お詫びすると同時に深く感謝する。

一九九五年九月十九日

飯田　隆

言語哲学大全Ⅲ

意味と様相(下)

目次

まえがき

第二部　可能世界意味論と様相の形而上学

第4章　様相の論理学……3

4・1　創始者による無視――フレーゲとラッセル……4

4・2　意味論以前の様相論理……11

4・3　カルナップと様相論理の意味論……27

4・4　クワインの様相論理批判……34

4・4・1　様相への関わりの三段階……34

4・4・2　内部量化……41

4・4・3　様相と記述……57

第5章　可能世界意味論……89
5・1　基本的発想……89
5・2　様相命題論理のモデル論——到達可能性……92
5・3　様相量化論理のモデル論——個体と世界……111
5・3・1　固定指示子と真理値ギャップ……113
5・3・2　真理値ギャップの追放と存在述語……126
5・3・3　同一性……140
第6章　可能世界意味論の応用と哲学的基礎……155
6・1　自然言語の意味論……160
6・2　哲学的概念分析への応用……174
6・3　可能世界とは何か……197
6・4　貫世界同一性……220

第7章　直接指示の理論……255
7・1　固有名と記述――「標準理論」……259
7・2　「標準理論」への批判……273
7・3　新たな標準理論に向かって……290
7・3・1　指示の歴史的説明……293
7・3・2　自然種名と物質名……297
7・3・3　指標詞……304
7・3・4　「フレーゲのパズル」……314
終　章　必然性とア・プリオリ性……339
可能世界意味論とは結局何だったのか……339
ア・ポステリオリな必然性……342
ア・プリオリな偶然性……349
浅い必然性と深い必然性……355

第二部への文献案内……365
索 引

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com